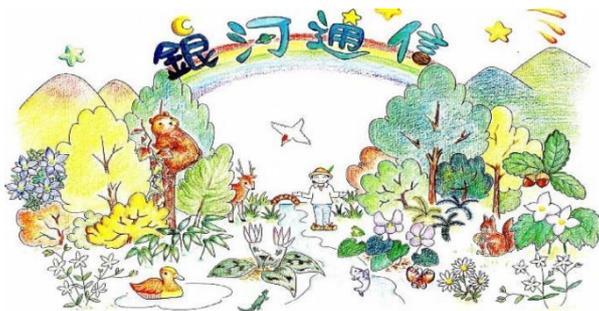


No.240

2024.7.10 発行

編集・発行人 樋口みな子

創刊36周年  
Since 1988



紙媒体での年間購読を  
ご希望の方は2,000円  
のご負担で郵送します

郵便振替「銀河通信」  
02740-7-56535

読者に支えられて、「銀河通  
信」は7月10日に36周年  
を迎えることができました

全国各地で、平和や脱原発を含む環境問題、不当な人権侵害と闘っている多くの読者に支えられました。市民運動はたくさんあるのに、そのことを伝えるミニコミは少ないように思います。新聞やテレビで伝えないことを伝える役割があったのかなと思います。でも私は文章が上手いわけでもなく、ここ数年はそれぞれの地元で頑張っている活動を読者から伝えていただいて、多くの読者と共有できたのが嬉しかったです。



今思い返すと、通信の発行を継続することが困難な日々もありましたが、なんとか休むことなく発行できたのは支えてくださった読者のおかげです。

本号の報告では、3ページの「ガザ、いま再び～私たちはここに未来を植える～」には参加していませんが、世界の平和を願う「世界祈祷日2024」、札幌で開かれたハンセン病市民学会、イタリアを代表する作家ダーチャ・マライーニ講演会や写真展に参加しました。どれも読者の皆さんに伝えたくかったので、4人の方にご寄稿いただきました。

私はクリスチャンになってまだ3年足らず。人生でぶつかった悲しみや苦しみの中でキリスト教と出会いました。聖書とミサで亡くなった夫も私もどれだけ救われたかしれません。今まで祈るという習慣はありませんでした。感想を書くのは無理だと思いました。

合同礼拝でキリスト教徒のパレスチナ女性が、住んでいた土地を追いやられた人の悲しみや、ジャーナリストの叔母を殺害されたけれど、真実を語り、正義を求め続ける勇気を与えてくれたと語ります。祈る力を教えられました。(ひぐち・みなこ)



一日も早い  
停戦を！

## 北海道パレスチナ医療奉仕団の 帰国報告会に参加しました

札幌駅から少し遠いカトリックセンターで6月29日に開かれ、100人近くの市民でいっぱいになりました。同月8日にエルサレムに着き、14日まで支援活動をして16日に奉仕団は帰国したばかりです。



はじめに猫塚義夫団長(医師)=写真左端=はヨルダン川西岸地区を拠点に東エルサレムの難民キャンプでの状況と支援活動について報告がありました。

「その西岸地区では昨年10月7日以降、508人が虐殺されています。そのうち124人が子どもです。軍事支配が強化されている。入植者が凶暴化。住民が抑圧されている。精神的なケアが必要だ」と訴えました。

診療は限られた医療機器だけで行うが、130人以上の患者を診療。現地の医療機関に繋ぎ帰国されました。

亡くなった夫の大学時代からの親友、細川佳之さん=写真中央=はパレスチナ支援の団員として活動されていて子ども支援活動について話され、パレス

チナには今回で4回目だったそうです。夫と同じ中学理科教員でした。星好き、バレーボールと共通点が幾つもありました。細川さんの報告です。

「外に出て遊ぶ子どもの姿が減っている。そのためボール遊びの指導があまり出来なかった。ある難民キャンプは高校がない。そのため、生徒はイスラエル兵の検問所を通って通学する。嫌がらせが日常で、学校に行かない生徒が増えている。自分たちの活動は、継続して支援することが信頼関係をつくる」と。

一番心に響いたのが「日本政府はアメリカに従うのではなくて、独自の外交でイスラエルに働きかけてほしい」と猫塚団長が話した言葉です。一刻も早い停戦を願っています。(文&写真撮影:ひぐち・みなこ)

## パレスチナの平和を祈る『世界祈禱日 2024』に参加して

佐藤裕子

(カトリック札幌教区正義と平和協議会・札幌市)



カトリック札幌教区に、今年度正式に発足したエキュメニカル委員会の主催で、5月18日(土)の午後、札幌での『世界祈禱日 2024』が行われ、朗読者のお役目をいただいた私は、初めてこの祈禱会に参加しました。

これまでも各地で続けられて来た祈禱会が、新型コロナによって中断されて以来4年ぶりの再開を喜び、150名を超える方々が北一条教会にやって来ました。プロテスタントも、カトリックも、また、新聞報道を見た一般の方々も、日々厳しさを増すばかりのパレスチナに自分ができることを求めて集まったのでした。

合同礼拝に先立ち、代表の小野有五さんから『パレスチナの歴史と現状』のミニ・トークがあり、こ



合同礼拝の前に行われたミニ・トーク風景 (撮影：発行人)

の戦争に至るこれまでを学び、自分はこの聖書の地の現実をどれほど真剣に考えたことがあったのだろうか、と振り返る、祈りの前の準備の時間となりました。

カトリックの蓑島克哉神父(司式)と、日本聖公会北海道教区の笹森田鶴主教=写真=が並んで説教台に向かう座



(撮影：発行人)



世界祈禱日でパレスチナ女性の訴えを朗読で聴く参加者

(撮影：小野有五さん)

席に着かれ、私もプロテスタントのお二人と共に朗読台の座席に並びました。詩篇の朗読、黙想、・・・式文に沿ってプログラム

は進み、普段は歌うことのないプロテスタントの賛美歌を歌い、それぞれの『主の祈り』を唱え、パレスチナの3人の女性の手記の朗読では、平和から最も遠い状況下で平和を求める人たちのことばを聞きました。そして笹森主教のメッセージ「平和は実現するものです」を受けとめる私たち。そこから、それぞれが、正義と平和の使者として歩み出しました。

礼拝の結びとなる約束のことばの一つ「神の正義と平和が、世界全体を治めるそのときまで、私たちは互いに愛をもって忍耐できますように」、それはすなわち「殺すな」です。どんな大義名分のもとであっても失われて良い命などありません。すべての人が与えられた命を全うできる世界を実現するための愛と忍耐が行き渡るよう、宗派も宗教も超えて集まった方々と祈った1日でした。 (さと・ゆうこ)

おすすめ本  
紹介



ヤジ排除の後に来るものは？ 「ヤジと公安警察」

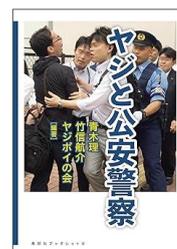
青木理、竹信航介、ヤジポイの会 (編著)  
寿郎社ブックレット 1,210円

2019年7月、当時の安倍総理が選挙の応援演説で来札。「アベヤメロ」「増税ハンタイ」と叫んだ二人が公安警察に排除されました。その違法性を問う訴訟の原告と弁護士、市民団体が開いた集会の記録です。

原告男性は、公安警察は「特定の思想を持った個人や団体を監視し、その活動の広がりを妨げること」が「最大のミッション」と主張しました。北海道警察によるヤジ排除問題では、その「実行部隊」がいわゆる公安警察であったことが明らかになっています。『日本の公安警察』などの著書があるジャーナリストの青木

理さんも公安警察のあり方がヤジ排除問題の背景にあると推測し、警鐘を鳴らします。普段表に出ることのない公安警察の実態にフォーカスした貴重な内容となっています。「つばさの党」による選挙妨害事件が相次ぎました。

市民が肉声で批判的な声を上げることと選挙妨害事件を同一視することが、民主主義にとっていかに危険かを立ち止まって考える一助になるブックレットです。 (ひぐち・みなこ)



# 「5・18 岡真理パレスチナ・ナクバ講演会 in 札幌」に参加して

ガザ、いま再び ～私たちはここに未来を植える～

黒田敏彦

(北海道朝鮮学校を支える会、  
札幌市に人種差別撤廃条例をつくる市民会議)



主催は「北海道パレスチナ医療奉仕団」、「北海道アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会」、「パレスチナ連帯・札幌」の3者で、岡さん=写真=は、早稲田大学文学学術院教授・京都大学名誉教授、専門は現代アラブ文学・パレスチナ問題です。会場の定員は、320名とのことでしたが、ほぼ満杯の聴衆でした。

ガザの様子は、ガザからのフェイスブックやインスタグラム、米国 CNN の日本語同時通訳ニュースなどで見ていましたが、今回の講演を聴いて第一に思ったことは「報道のゴマカシが明確になりスッキリした」と言うことでした。世界や日本の主流の報道では、真実の報道が避けられ、バイアスがかかっていることが分かったからです。

CNN のニュースでは、10月7日の頃は、中継でイスラエル軍の広報の人までが出てきて、ガザでの軍の行動の正当性を説明することがしばしばありました。(最近は、あまりありません)。その後、アメリカの市民がガザに対する攻撃に抗議して米国で高速道路を封鎖して止めることなどもしていたようですが、番組では、あまり取り上げられませんでした。

やがて、米国の大学で学生が抗議のキャンプを始めると、学長の対応があまりなどと主張する議員の意見などが主に紹介され、大学側の学生に対する対応が中心の話題でした。最近になってようやく、学生のインタビューを見ることができました。しかし、イスラエルと関係が深い企業への出資引き揚げを学生が要求していることなど、掘り下げて紹介されていないようです。

講演で初めて聞いたのですが、岡さんは、『ニューヨーク・タイムズ』の用語統制の内部告発についても述べていました。ここでは、(長周新聞、2024年5月18日の記事から)

イスラエルの犯罪報道のみ「慎重に」

『ニューヨーク・タイムズ』から流出したメモは、記者がガザ報道に関する記事を書く場合どのような用語

を使い、そのような表現に注意すべきかの基準を示したものだ。そこでは「大量虐殺」「占領地域」「民族浄化」、さらには「難民キャンプ」などの国連でも使われている用語や表現が「不使用」とされている。「パレスチナ」という用語(領土および国連承認国家の両方をあらかず名称として広く使用されている)すらも「通常の文章や見出しには使用しない」と記載されている。

これはアメリカの場合だけに限らないかも知れません。日本政府もイスラエルと経済連携協定を結んでいます。

「2023年10月7日に始まったのではない」。1947年11月29日、国連総会は、パレスチナを分割して、ここにユダヤ国家を建設する分割案を賛成多数で可決した。総会に先立ち、この分割案を子細に検討した Ad-Hoc 委員会が出した結論は、分割案は「法的に違法、(アラブ国家は)経済的に持続不可能、政治的に不正」というものだった。アメリカ国務省も当初、明らかに現地住民が不幸になることが分かっている案に賛成できないとしていたが、トルーマン大統領の介入により賛成にまわり、総会では米ソの多数派工作により可決された。

封鎖は解除されず、産業基盤は破壊され、住民8割が国際社会の支援に依存し、難民は帰還できず、水道水の95%が汚染されている、…ガザ。世界はそんなガザ、パレスチナをずっと見捨ててきました。「これからも、イスラエル建国前後から続く、パレスチナの土地や人びとに対する入植植民地主義による行動、虐殺、違法行為を黙認するのか」

(くろだ・としこ)

購読料と寄付をありがとうございます<2024.5.7~7.1>

郵便振替「銀河通信」02740-7-56535

小池修生 小林嘉則 (5月、ご逝去されました)  
澤耕司 宍戸隆子  
鈴木陽子 土門寛治  
中村秀子 芳賀孝郎  
芳賀淳子 松田裕明 (五十音順、敬称略)

購読料と寄附、合計 39,000 円は印刷と送料に使わせていただきます。郵送読者の方は年間(6回)2,000 円を郵便振替先をお願いします。

Web 読者は無料ですが、応援カンパを歓迎します。

## ハンセン病市民学会「菊池訴訟」の分科会に参加して

西村武彦（札幌市・弁護士）

5月12日、札幌市内で開催されたハンセン病市民学会の「菊池訴訟」の分科会に参加した。小さな会場は50人程度の参加だったが、熱気は凄まじかった。求められる課題の多さとその重さに、私の頭は痛くなった。

それは68歳の私が人間としてどう連帯をすべきかという問題を投げかけられたこと、それを受け止めたことから生じる心地よい痛みだった。樋口さんは徳田弁護士の言葉に涙を流したと言われたが、私には心にビビと電波のようだった。

「菊池事件」と呼ばれる事件は2つの冤罪事件である。ハンセン病患者がその当事者（Aさんと書く）なので、プライバシーの保護から、彼が収容されていた熊本県内にある菊池恵楓園の名前をとり、菊池訴訟と呼ばれている。

1951年、役場の職員B宅にダイナマイトが投げられた。その犯人としてAさんが逮捕され、療養所内で裁判を受け、懲役10年とされた。判決の7日後にAさんは脱走したが、不幸なことに、その翌日、Bさんが20数カ所も刺されて死亡する事件があり、その加害者もAさんとされた。この「殺人事件」の裁判の問題が、この分科会で弁護士らから語られた。

裁判そのものが、この施設の病院内に作られた法廷（公開法廷ではない）で行われたこと（憲法82条に抵触しないのかという問題）、被告人が認めていない証拠にも全て同意するという無気力な国選弁護士と、親族の誘導された自白調書が証拠採用され、死刑を言い渡されたことが問題である。徳田弁護士は、2つの事件についてAさんが犯人ではない理由を縷々述べてくれた。

Aさんは再審請求が棄却された翌日の1962年9月14日、死刑を執行され、Aさんをご存命ではないが、そのAさんの無念をはらすべく「菊池事件国賠訴訟」が提起されているし、2021年には遺族が「再審請求」を起こした。

2024年5月30日には、その再審請求に関して、弁護団は、九州大学名誉教授の内田博文氏の尋問を求めて、裁判所、検察庁と協議をするとのこ

とである。内田氏は、政府が再審の制度を作るべきであり哲学の転換が必要だと述べておられた。

この分科会では、鴨志田弁護士が、再審法の改正をめざして運動をしていること、国会内に超党派の議連が設立され260人を超える国会議員が参加していること、2024年2025年度にも改正法案が成立する可能性があることを、もの凄い熱量で演説された。

以下は感想である。

ハンセン病は感染力は非常に弱い。コロナなどと違って簡単には感染しない。しかも、コロナと違って生命にも直結しない。そういう微弱な感染症だったが、誤解と偏見の中で、15年戦争以前から日本では「無らい県運動」があり、戦後の1947年にも再度その運動が推進され、ハンセン病患者への差別を強めた。特効薬のプロミンは1946年から日本でも使用され、投薬によって短期間に完治する病であったにもかかわらず、そのような正しい情報は広報されなかった。ハンセン病に関する国の遅い対応こそが、問題の根底にある。

さて、熱い分科会だった。太田さんという方は、この問題を知った以上避けてはいけない、同時代を生きるものの義務だという趣旨のことを言われた。

私達は、日々の生活にかなり疲れている。私自身は68歳の高齢者である。だが、同時代の悲劇を見捨てるのは偲びがたい。だから、この集会に足を運んだ。次の一步は図書館に菊池事件の本を入れて貰うことでもいいし、署名の一筆でもいいし、映画への参加でもいいし、一番近い青森市の療養所の見学でもいいはずだ。1人が小さな1歩を歩めば、再審法の改正への道や、菊池事件再審の道はやがてできるはずだと、私は思った。元市民学会会員で、今も札幌で弁護士を生業とする西村武彦の集会報告記でした。（にしむら・たけひこ）



ヤマユリの季節がやってきましたね。

八ヶ岳エスペラント館がある山梨県北杜市の山の中に海岸寺というお寺がありますが、その庭にたくさんヤマユリが咲いていたのを思い出します。

堀泰雄（エスペラント作家・前橋市）

# ダーチャ・マライーニ氏を囲んで

— 文学とフェミニズム —

水溜真由美 (北海道大学大学院文学研究院)

ダーチャ・マライーニさんは 1936 年生まれのイタリアの著名な女性作家である。1 歳の時に人類学者だった父親の研究のために家族で来日し、幼少期を戦時中の日本で過ごした。1943 年、母国イタリアにおけるムッソリーニの失脚後、両親が、ドイツの傀儡国家となったサロ共和国 (イタリア社会共和国) への忠誠を拒否したために収容所に入れられて過酷な体験をした。

日本における家族の最初の滞在先が札幌であったこと(当初、父親は奨学金を得て北海道大学でアイヌの研究を行った)、その間、宮澤＝レーン事件の宮澤弘幸およびレーン夫妻と親交があったことから、宮澤・レーン事件を考える



会のメンバーが中心になってダーチャ・マライーニを日本に迎える会を立ち上げて日本への招聘運動を行い、今回の札幌

訪問が実現した。6 月 16 日(日)には、北海道大学農学部大講堂でダーチャ・マライーニ講演会「日本の記憶と『わが人生』=写真上=が開催された。

その翌日の 6 月 17 日(月)、北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟にて、「ダーチャ・マライーニ氏を囲んで—文学とフェミニズム—」を開催した。このセミナーでは、マライーニさんの文学活動とその底流にあるフェミニズムの思想をテーマとした。私は今回のセミナーに備えて日本語に翻訳されている 12 冊の著作のうち 7 冊を読んだが、どの作品にもフェミニズムの観点が強く感じられた。たとえば、『別れてきた恋人への手紙』はウーマン・リブの運動の経験に根ざす女同士の関係を主題とした作品であるし、『シチーリアの雅歌』、『イゾリーナ 切り刻まれた少女』、『声』は性暴力の問題を中心的に扱った作品である。また、『帰郷 シチーリアへ』は日本からイタリアに帰国した後に少女時代を過ごしたシチリアについて回想した作品だが、シチリアに暮らす母方の一族の女性祖先についての言及が印象的である。戯曲『メアリー・ステュアート』は、メアリー・ステュアートとエリザベス 1 世および両者の乳母と侍女の四人が織りなす対話劇だが、多くの台詞の中に、女性に課せられた性役割に対する鋭い問いかけが見られる。

セミナーはマライーニさんの希望により質疑応答の形式で、通訳を交えて進められた。まず私が用意した 4 つの質問に答えていただいた後、6 人の来場者からの質問に答えていただいた。紙幅の都合上、それらのやりとりを逐一紹介することはできないが、全体として、マライーニさんのリプライは文学よりもフ

ェミニズムに力点をおくものだった。またフェミニズムと言っても、同時代の運動についてのみでなく、古代から現代に至るまでのヨーロッパにおける女性をとりまく状況について、大きなスケールでお話いただいたことが印象的だった。

マライーニさんは、自身が幼い頃から不正に対する怒りに突き動かされていたと述べ、信念を貫く勇気の価値を強調した。締めくくり若い人へのメッセージをお尋ねしたところ、ロールモデルの必要を主張したが、私や会場からの質問に対するリプライの中では、歴史上の偉大な女性として、アルテミジア・ジェンティレスキとヒュパティアについて言及した。

前者は 17 世紀のイタリアで活躍した才能ある画家で、画家であった父親のアシスタントにレイプされた際に、暴力に屈せずに被害を訴えたという。

後者は 4 世紀頃のアレクサンドリアで活躍した天文学者であり、教会の弾圧に屈せずに地動説を唱え、非業の死を遂げた。

他方で、両親について問われた際には、才能豊かな画家であった母親が 3 人の子供を育てるために仕事を諦めざるを得なかったと回想した。マライーニさんは、母親が育児を通じて教育者としての能力を開花させたと述べ、収容所では学校の先生の代わりに勉強を教えてくれたことに感謝の念を示しつつも、世界各地を飛び回り人類学者としての才能を遺憾なく発揮続けた父親との差異にも触れて、アンビバレントな思いをにじませた。

本セミナーには 90 人近くの来場者があったが、皆、87 歳とは思えないマライーニさんの情熱的な語りによって圧倒されたことと思う。 (みずたまり・まゆみ)



「ダーチャ・マライーニ写真展」北海道文学館にて  
6月15日～19日 (撮影: 発行人)

おすすめ本  
紹介



生きることに命をかけた家族の姿  
「密航のち洗濯 ときどき作家」

宋恵媛・望月優大(文)、田川基成(写真)  
柏書房 1,980円

終戦から間もない 1946 年夏、朝鮮から日本へ「密航」した尹紫遠(ユン・ジャウオン)と、日本で裕福な家庭に育ちながら、その男性と生きることを選んだ大津登志子が築いた家族の物語です。蔚山(ウルサン)、釜山、山口、東京。ゆかりの土地を歩きながら、100年を超える歴史を丹念に描き出します。

貧しい夫婦が生きてするために選んだ稼業は洗濯屋。残された登志子と朝鮮人として生まれた三人の子どもたちは、差別や偏見と対峙しつつ、それぞれの人生を歩みます。家族の歴史は、男性が残した小説「38度線」と日記によって、明らかになります。終戦後、朝鮮と日本との複雑な関係の中での結婚生活の過酷さは、想像を絶します。激動の時代、生きることに命をかけた家族の姿がひしひしと伝わってきます。この苦境を生み出した政治と社会、そして戦争がもたらす困難の残酷さ。その背後に無数の人々の人生に、悲しみと憎しみを及ぼす戦争の一断面を、一つの家族の

物語から読み取ることができました。

働けど働けど暮らしは楽にならず、夫は妻に暴力を奮い、妻は基督教に救いを求めて広島牧師を頼って子どもたちを連れて家出をします。登志子がそれでも縁をきらなかったことに敬意を覚えました。夫の死後、登志子は年金ももらえなかったのですからその苦しさは想像を絶します。

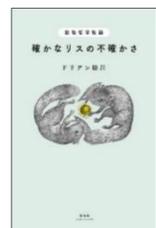
長男・泰玄(テヒョン)が苦学しながら上智大学に進学し、卒業後は外資系金融機関に就職。その後の国籍変更への葛藤も描かれます。次男も大学を卒業しますが50代で病気のため亡くなりました。長女・逸己(イルギ)は夜間中学、定時制高校を卒業。長男を出産。産業ロボット工場で長く働くのです。老いた母は介護施設には入らなかったようです。長女が介護を担いました。子どもたちが自分で未来を切り開いていった姿を父・尹に見てほしかったです。(ひぐち・みなこ)



ぼくたちの声を聞いて  
「動物哲学物語 確かなリスの不確かさ」

ドリアン助川(著)、溝上幾久子(版画)  
集英社インターナショナル 2,000円

クマ、キツネ、リス、ニホンザルなど日本で身近な動物や、ナマケモノ、バク、アリクイ、イグアナなど主に南米の動物の目線で物語が描かれます。それぞれの生態に即した物語の中に悩みや葛藤が語られ、哲学的な問いが生まれます。



どんぐりの落下と発芽から「ここに在る」ことを問うリスの青年など 21 の物語。

ガビチョウをご存知ですか？最終章の「対話する鳥」に登場します。中国南部、東南アジアに生息し、1970年代に日本に大量輸入されましたが、鳴き声の大きさから放鳥され野生化した鳥

です。ガビチョウは森の生き物すべてに話しかけるような勢いでさえざります。その歌を聴いてください。

「その雨を吸って芽を出すどんぐりだって神様のかけらだよ。ぼくも神様のかけらのかけらだし、あの人だって、かけらのかけらなんだ。(略) 神様のかけらであるぼくはあなたを見ているし、あなたの言葉を聞いて

いるよ。あなたはぼくと話すことができる。あなたの心の中にもきっと森がある。そこには、無数の透明な木の実が落ちているよって」

ガビチョウは朗々と歌いました。そこにはドリアンさんが投影されているようです。子どもの頃から、人間社会が苦手な動物に語りかけ、哲学に惹きつけられたのも、目の前のことだけに忙しくしている人間社会への反発だったことが明かされるのです。ガビチョウは自分とどこか似ているなと思います。いつもだれかとおしゃべりをしているのは、心のなかに足りないものがあるからだと代弁するドリアンさんの優しさと観察力に脱帽です。

私も子どもの頃、父の転勤でどこにも居場所がなかった時期、祖父母の住む日高の山奥で、野山の自然と遊ぶのが大好きでした。人間に害獣として駆除される動物や絶滅危惧種の動物の目線からは、殺し合いをやめられない人間の愚かさにも気づかされます。

(ひぐちみなこ)

原作者は「ローマの休日」の新聞記者のモデル  
「ナガサキの郵便配達」

ピーター・タウンゼント(原作)、中里重恭(翻訳)  
スーパーエディション 1,320円

本の最初の頁には、「この本を、天国の谷口稜暉(すみてる)さんに捧げます」とあります。1945年8月9日に広島原爆(ウラン型)に続いて、2発目のプルトニウム原爆(プルトニウム型)が長崎市内に投下された。この日も、いつものように平穏に郵便配達をしていた16歳の少年スミテル(小説内の名前)の上空でピカドンが起こった。小説はスミテルの被爆治療の経過など通して、助けてくれたおじいさんや家族・知人の物語を追って展

開していく。

一方、米国側におけるトルーマン大統領や軍部などの内情も表している。原爆を落とされた側と原爆を投下した側、この時点では日本から見れば鬼畜米英の世論、片や真珠湾奇襲攻撃をした何をしてかすか判らない神の国・神風日本、どちらも憎き関係です。



このノンフィクション小説は、映画化もされています。原作・翻訳ともに素晴らしいです。平素から原発・原爆・ヒバクに反対する一市民運動家として、この小説に巡り会ったことは大きな収穫でした。「ローマの休日」でグレゴリー・ペックさん演じるアメリカ人新聞記者のモデルになったのが、ピーター・タウンゼントさんだそう

です。鋭い感性が素晴らしい、そして、優しいハートをもって書かれたこの小説の原作者の魅力がオーディリー・ヘップバーン演じる某国の王女とひとときの恋を楽しんだ名優グレゴリー・ペックさんと重なってきます。  
(神戸市・高橋精巧)

みな子のおすすめ  
新作映画



虐殺の隣で平穏な生活 『関心領域』 ジョナサン・グレイザー監督



ルドルフ・ヘス一家が暮らす邸宅では、何事もないかのように平穏な暮らしですが、常に聞こえる、人の叫び声や銃声、焼却炉の轟音と共に

真っ黒な煙がいつも上っていて、アウシュヴィッツ強制収容所と壁一枚で隣接していることに気が付きます。

様々な不穏な音をまったく聴こえていないかのように、子どもに接するヘス所長。妻のヘートヴィヒは、広い庭園、温室、プールがお気に入りです。収容所から運ばれた衣類の中で豪華な毛皮のコートを着用し、ポケットにあった口紅を塗る異様さ。幼い息子は、死体から抜き取られた金歯で遊んでいます。娘夫婦のところに来た母は、数日後、異様な音に気が付き、そっと出ていきます。壁の向こう側で何万人というユダヤ人が虐殺され、遺体が焼却炉に送られていました。ヘスはまるで荷物の処理を語るかのような効率の良い焼却について会議にかけるのです。とても普通の神経とは思えません。

中盤、真夜中に畑のリンゴを盗んで土に埋めていくポーランド人少女のシーンでは、サーモグラフィで撮

影した映像を使うことで、闇を強調させています。少女は反ナチスのレジスタンスとして、収容所のユダヤ人のために食べ物を置いて歩いた実在の人物がモデルと知りました。心優しいポーランドの少女が、闇の中で収容者の作業場にリンゴなどの作物を隠し、飢えた人々を助けようとしている姿が映しだされます。グレイザー監督が現地で取材していた時に出会った90代の女性アレクサンドラさんの若いころの体験だそうです。ほとんど映画では説明がないので、私の一番伝えたいことなので記したいです。

映画では、この少女の行動が、ヘス一家の無関心さと対比するように、希望として描かれています。

イスラエルとパレスチナ自治区とは壁を隔てて、子どもたちや女性が無差別に殺されています。アメリカの学生たちが抗議の声を上げています。でも日本ではあまり伝わってないように思います。ナチスによるホロコーストだけでなく、虐殺など現代にも通じる話では。調布の読者からは、たった一人でガザ地区の平和を訴えて活動の輪を広げた女性のことを知らせてくださいました。

私も「戦争やめて！」と、デモに参加したい。

ポーランド政府が隠したかった真実を告発 『人間の境界』 アグニエシュカ・ホランド 監督

『ソハの地下水道』で知られるホランド監督の作品。この映画は2021年9月以降にベラルーシのルカシェンコ大統領がシリアやアフガニスタンから「難民」を募って一度ベラルーシに集めたあと、難民をポーランド国境からEU圏に送り込むという、いわゆる「人間・難民の武器化」を題材としています。



ポーランド側に文字通り「投げ込まれた」難民達は、ポーランド内での庇護やスウェーデンへの移住を目指すのですが、まずはベラルーシ・ポーランド国境地帯の自然は、難民たちが自分の足で安全なところまで移動するにはあまりに過酷です。

この国境地帯の沼地で、重要な登場人物が命を落とします。そんな国境を超えようとする難民家族を中心に、国境警備隊、難民を支援しようとする活動家達を

それぞれの立場から描きます。

シリア人一家は機内で知り合ったアフガニスタン人女性と国境へ。しかし国境警備隊は金を要求し、ポーランド側に放り出します。ポーランド側も再びベラルーシに追い返します。両国の非道な扱いに翻弄される難民たち。極寒の森をさまよひ、死の恐怖にさらされます。

心を揺さぶる人間ドラマとして映像化を果たしました。実際に難民だった過去や支援活動家の経験を持つ俳優をキャスティングしたことで、ドキュメンタリーと見紛うほどの圧倒的なリアリズムが産み出されています。

ウクライナ難民は歓迎し、シリア難民などは迫害という事実には衝撃を受けました。人種や国籍を超えた行動や選択が、人々を変えていくことに勇気をもらいました。当時のポーランド政権は本作を激しく非難しましたが、大ヒットしたと報じられました。映画は無力ではないという監督のメッセージが伝わってきます。

※映画作品の写真はHPから転載

## 懐かしい原始ヶ原に登る



富良野岳には十勝岳温泉から何度も登っていますが、原始ヶ原には30数年ぶりに登りました。十勝岳連峰・富良野岳の南麓に広がる雄大な山々に抱か

れた標高1000m付近に広がる高層湿原が原始ヶ原です。前日、友人宅に泊めてもらい、6月23日大雪と石狩の自然を守る会(旭川)のひぐま大学に聴講生として参加しました。私は一年ぶりの登山でした。

朝から雨が降りそうな天気でしたが、登山口に着く頃には晴れました。ゆっくり登山ですが、急な登りが



ウズラバハクサンチドリ



ツルコケモモ

続きました。不動の滝の迫力ある滝に参加者から歓声が上がりました。ガイド本には長靴がいいとありましたが、登山靴にスパッツにしました。つり橋状の丸木橋を渡る



と不動の滝でした。ここで豪快な滝を楽しみ、山道を行き、森の中の急斜面を登ると原始ヶ原に出ました。



「北海道」と命名したことで知られる探検家・松浦武四郎が、幕末の北海道内陸探検(最後の探検)の際に、和人(アイヌ以外の日本人)として初めて訪れた

場所だそうです。ここから眺める富良野岳がきれいでした。

湿原では、小さな高山植物がたくさん咲いていました。ホロムイソウ、ウズラバハクサンチドリ、ツルコケモモ、タニギキョウ、ウコンウツギ、イチヤクソウ、などなど。名前と花が一致しません。とても楽しい山行でした。高山植物のパトロールも出来ました。(ひぐち・みなこ)



◆内容の濃いことに驚いています。みな子さんは市民記者なのですね。撮影も見事！そして人脈の豊かな事。6月29日に調布で『ガザ=ストロフ=パレスチナの吟(うた)』上映会があり観ました。満席でした。「発信は人を繋げる輪を作る」この映画の感動をみな子さんに伝えたい。市民の手で、力で全国に広がることを願っています。(鈴木陽子さん)



### 読者の声

◆樋口さんの豊かな感性と行動力には、正直驚きます。そのよりそいは、見事なものだと思います。勇気を貰っています。(西村武彦さん)

◆あなたの昨年からのご心労深く感銘いたしました。私は、あなたの世界平和の考え方に全く同感です。2022年末に国家公園榮譽解説員として引退致しました。(台北市・張玉龍さん)

◆本と映画、あれだけの読書と映画鑑賞、大変な時間と労力をかけておられるのに感嘆しております。(石川旺さん)

オッペンハイマーと  
P・ハミル  
山田洋次

ピート・ハミルがあるときこんな話をしてくれたのです。原爆投下のとき、彼は小学生で4人兄弟、彼のお母さんはアイルランド系移民の娘で、敬虔なクリスチャンだったが、朝食のとき、新聞を片手に、悲しげな表情でこう言われた。「愚か者のトルーマンが日本のクリスチャンが大勢いる街に恐ろしい爆弾を落としました。犠牲になった日本の信者のために祈りましょう」それを聞いて4人の少年たちも心を暗くして指を組んで懸命に祈ったという。一昔前のアメリカ映画によく描かれる、誠実な中産階級の家族の朝の光景を思い浮かべながらその話を聞いたものです。今の世界にあつて、僕はピートや彼のお母さんや家族のような、謙虚で思慮深いアメリカ人を信じたいと切実に思います。Make America Great Again! と大声で叫ぶような人々ではなくて。

朝日新聞 2024.6.15  
(まとめM・Mさん)

## 海鳴りの島から 沖縄・ヤンバルより

辺野古新基地建設問題が起こってから、沖縄県民の大多数が反対の意思を示し、抗議をくり返してきた。/それを力づくで押しつぶし、工事を強行してきたのが自公政権だ。/米兵による犯罪が明らかとなるなか、工事を強行して死亡事故まで引き起こしながら、それでも工事を続ける沖縄防衛局に対し、工事を止めろ！と激しい批判の声がくり返された。(2024.6.28)

目取真俊  
(めどるま・しゅん)  
作家のブログから

